

保會知、

〔倭名類聚抄十七〕熟瓜 廣雅云、虎掌、羊駝、小青、大斑、和名保會知、俗用熟瓜二字、或說極熟蒂落之義也、皆熟瓜名也、

〔箋注倭名類聚抄九〕按保會知甜瓜之熟者、甜瓜以美濃國真桑村產爲佳、故今俗呼真桑瓜、

〔伊呂波字類抄植物附植物具〕熟瓜 ホソチ

〔庭訓往來〕菓子者、柚柑、柑子、橘、熟瓜、澤茄子等、可隨時景物也、

〔倭訓栞中編二十三〕ほぞち 和名抄に熟瓜をよめり、極熟して蒂落るの義也といへり、枕草紙

にほうちほうたうまいらせんと見、うはりの誤字なるべし、

〔安齋隨筆前編一〕ホゾチ 清慎公の集に云、女御すの子御隔子みかふしおろしたるまぎれにうせた

れば、

ぬす人はほぞちを見ても雨ふればほしうりとてや取かくすらん

和名抄に、熟瓜和名保會知、俗用熟瓜二字、或說極熟蒂落ノ義也とあり、ほぞちはほぞおちの略語にて、うりの至極うみたるは、おのづからほぞはなれ落るゆへほぞちと云也、是今俗にまくわうりといふもの也、まくわうりといふを、甜瓜の本名と心得は誤なり、美濃國本巢の郡真桑といふ地所より作る甜瓜を、真桑瓜といふ、味よきゆへ賞する也、他所にて作りたるを真桑瓜といふは非也、甜瓜と書てカラウリとよむ、唯うりと計も云也、白瓜きうり其外さまぐの瓜と名付る物多き中に、唯甜瓜のみをうりといふ事は、花もさまぐ多き中に、櫻のみ花といふが如し、又かな文字にて瓜を書くには、うりと書ずしてふりと書事、かなづかひの習也といふ説あり、甚あやまり也、ふの字を上にて置て、うとよむ古例なし、和名抄に、宇利と書れば、うりと書を本とすべし、定家假名遣ひなど、云俗書は、日本紀、古事記、萬葉集、其外の古書のかなづかひと相違する事、俗説は取にたらず、